

第 10 話：弱音ハクと象牙の門

(1)

ミクは、頭の上にぬこを乗せて、どういたらいいか分からずに立ち尽くしている。どうやら、自分のせいで二人はケンカを始めたようだ、ええと、どうしよう、と悩んで、はたと名案を思いつく。

「ねこさんもてつだってね？」

「にい？」

「うん、合唱するの。そうね、第五位でいいかな・・・？」

「にい♪」

神曲の第五位、主天使奏楽(ドミニオン・ノート)は、精神面に作用する神曲で、歌の力で、カタルシスを起こさせる、最も神曲らしい階位の歌といえる。

例えば、今回のような、ケンカの仲裁といった場面では、戦いにはやる気持ちを宥め、愛情を育むアウリエルが、相応しいといった具合に。

「じゃあ、いくよ？ボクに続けてね？」

「にゃあ♪」

すうっと深呼吸して、第五位。主天使奏楽(ドミニオンノート)アウリエルと、小声で呟くと、ミクを取り囲むように、光の五線譜が、空中に顕現する。

「お願い！ケンカをやめて？」

「みいつ。」

そう祈ってから、一人と一匹は歌いだした。心を癒すすばらしい歌を…。その歌を聴いて、珀世はぴたりとケンカをやめる。

歌っているミクに近づくと、にこっと笑いかけられた、上手い…。すんごく。私より、数段うまいわ。この娘…。と思って、まじまじと見つめる。

ミクも気付いて、ほっとしたように、無邪気な笑顔で、語りかけた。

「よかった。ケンカをやめてくれて。」

ミクに興味を覚えて、珀世は尋ねてみた。

なんだか、今の自分の指針になりそうだったからだ。

ごくりと、生唾を飲み込んで、気になっていることを訊(き)いてみた。

「ねえ。あなた…？」

「私のことは、ミクでいいですよ？」

「じゃあ、ミクちゃん。さっきの歌は
どこで、覚えたの？すごく、上手だったけど。」

ああといいながら、ミクはにこやかに、電波な回答をする。

「このねこさんの、思考をトレースして…」

「はっ？なんて言ったの？」

目を点にしながら、聞きなおしてみる。この娘もアレらしい。

「ですから、このねこさんの思考を
トレースして、歌にしたんです。」

「……………。私のこと、バカにしてるの？」

ミクは、ジト目で自分を見つめる珀世が、なぜ、そんな目で見られるのか分からずにとまどってしまう。ミクは素直に説明しただけだが、理解されなかったらしい。たまらず、唱太が助け舟をだそうとしたが、

「お袋、ミクは…」

「もお、いい！」

「 ちょっ！ 」

「 もお、いいわよ！私がスランプだからって、
どいつもこいつも馬鹿にして！ 」

「 待てよ！ 」

「 ミクちゃんも、私…、真剣に…、聞いているのに…、
訳分らないことばかりいって、ごまかすし。」

「 違います、私は… 」

「 うわああああああああああん！ 」

珀世は、泣きながら、家を飛び出していった。残された、二人と一匹は、
珀世を探しに再び、外へと飛び出した。

(2)

何よ、と珀世(ハクヨ)は思う。馬鹿にして、私だって、本気だせば、あのくらい楽勝
なんだから！と、自分を鼓舞し、先ほどのミクの歌を思い出し、悄然となる。何が、ね
こよ！私の歌は、猫以下ってこと？なんて、頭の中で愚痴っていると、別の声が頭に
響いてきた。

ウタヲウマクナリタイカ？なりたいわ。

ナラバワガチカラヲウケイレヨ。本当に上手くなるの？

ナルトモ、ミンナノココロヲミリオウデキルゾ。じゃあ。うけいれるわ。

彼女は、象牙の門をくぐりきたる、虚偽の夢だと気付きもせず、誘惑のままに受
諾する。そして、風に乗って、どこからか響いてくる怪しい歌を、BGM にして、珀世の
身体が、ノイズの影響を受けて変化していく、ひざのところまでのびた、烏の濡れ羽色
の腰のところからリボンで結んだ長髪は、あやしい銀色に変化し、瞳は充血したかの
ように、紅蓮に染まる。最後に、背中からは、黒い翼が生えて、空へと飛び立った。そ
の姿は、まさにセイレーンといえた…。

《 つづく 》